「生きている」ということ

村 井 千 里

花卉を利用する人々の多くに、「生きている」という感動を大切にしたり、植物の生活の不思議を発見する楽しみを知りたいという意識をもつ人が少ないようだ。20mを超える欅の枝先にまで水が揚がるのは何故と考えた人は何人いるだろうか。ある園芸に関心のある人々の研修会で質問すると、「木だから当然」という答えが大多数であった。

植物が生き残るために工夫していることへの諸現象を広く知らせてこそ、園芸に興味を深める人々が増加するのではないだろうか？ 園芸植物の生理・形態・生態などの情報の提供も不十分な今日、園芸植物への科学の目を育てることも大切であって、それに伴う基礎データの整備を行う必要を忘れてはならない。

昨今、小中学生の理科離れが問われているが、知識としての学習が多くなり、驚きの学科であった理科ではなくなってきている。中学校の教科書は、色刷りの絵本となり情報として正確で知識としては申し分がないのだが、実験を通しての未知のものに接した感動が湧いてこないほどに、懇切丁寧に出来上がり、結果が与えられてしまっている。

「こういうもの」という知識は豊富になり、問題はインターネットで調べ、それで終わる習慣になってきた現代人のガーデニングやフラワーアレンジなども、植物の環境変化に対応して、その時その時を生きているという過程の中での「生きざま」に感動してきた日本人の心のあり様を置き去りにしているように思われてならない。

安達瞳子さんは、花を生ける心は「那の一点」を大切にすることと言われている。瞬きをするような短い時の空間、人も植物もその積み重ねで生き、その中には生命の燃え上がる瞬間がある。そのような重大な時を凝視すると、生きるということの真実を取り戻す。野山で一輪の花に足を止めたり、庭で育てたり、花を室内に挿したりを続けてきたのではと、記している。そして、花を生けるという行為は、生きているものを切ることで、人と花とが一体となって、新しい作品としてその生命を生きるという。

その作品の生命を左右する環境をよりよくする的確な情報を提供しなければならない。フラワーデザイナーを目指す学生に照度計の使い方を問うと、けげんな顔をする人が多い。光補償点を知らないからだ。水揚げの技術はあるが、光が不足すると水揚げが悪くなるし、消耗が多く、那の一点の輝きができないという知恵になっていないからだろう。

花葉
2005
NO.24

目次

私の提案　「生きている」ということ……村井　千里（1）
最新科学情報　DNA、遺伝子、そして花産業……安藤　敏夫（2）
表紙解説　青いケシの産地雲南にて……田中　桃三（5）
文化の伝承　江戸時代からの斑入り植物……横井　政人（6）
日の丸ブリーダーの一人として……竹下　大学（10）
サントリーグループの花事業への取組み……村上　保之（14）
園芸古書の解説Ⅲ　～岩佐蔵書より～……岩佐　吉純（18）
自叙伝抜粋　園芸一筋の幸せ人生……鈴木　司（22）
私のビオラ育種……秋山　泰男（24）
花卉卸売業の後継者として……石田　裕一（31）
岐阜県における「花の都ぎふ」運動とバラ……上田　善弘（34）
「園芸」をテーマとした絵本を探す……山田　幸子（38）
海外園芸事情調査団報告　広州・香格里拉・老君山・麗江を訪ねて……山口　まり（42）
井手みえこさんを偲んで……植村　猶行（49）
「2005花葉サマーセミナー」リポート　動き出した生産者育種……久保田芳久（50）
花葉会総会（54）
花葉会会則・役員名簿（56）
花葉会賞受賞者紹介（57）
記念講演・アメリカの植物園に勤めて（61）
会員名簿の追加と訂正（62）

禁無断転載